

「信州と福沢諭吉」

丸 山 信

第一章 福沢諭吉のプロフィール

今から十五年前、昭和五十九年秋から一万円札の顔が聖徳太子から福沢諭吉に変わった時のことであるが、その少々前のことであった。大蔵省の役人が私の勤務先の福沢諭吉研究センターに来られ、福沢諭吉の写真を見せてくれと依頼され、たくさんある写真から福沢先生の晩年の写真二・三を借りて行かれた。詳細を話すことはできないが、一万円札の図柄にしたいといわれたことを記憶している。その後、新一万円札が発行された時、その中の一枚の写真が使われて、現在の一万円札になったわけで、私はこんなまたとないチャンスにであったのである。



(明治14年当時の写真)

もう一つ、明治九年十月八日付けの福沢諭吉自筆の明治生命保険に入ったときの「身体検査表」というものが遺品として福沢諭吉研究センターにあり、そこには「目方、英斤百四十三ポンド、日本量 十七貫百六十匁 内 八拾六匁 じばん、貳百匁 羽織、九拾匁 博多帯、・・・」と書かれている。諭吉はこの時、生まれて四十一年九ヵ月、目方が英ポンド一四三ポンド、日本流に直すと、十七貫百六十匁、・・・ということである。これから推察すると、諭吉の性格が綿密な人間だったのではないだろうか。また、諭吉が真面目できちんとした字を書いていたことがわかる。これは福沢諭吉の生涯を知るうえに重要な記録であると考えられる。

第二章 信州への最初で最後の旅行

明治二十九年十一月六日 家族（妻錦、長男一太郎、次男三八、中村里、小山完吾、北川礼亮）一行七名 藤屋宿泊（引用）。「時事新報」明治二十九年十一月十五日より。

翌日の十一月七日朝、長野駅発六時二十分の汽車にて直江津に赴き北海の模様を一覧、五智の古刹を訪ね、和久良楼にて小憩後、旅亭古川にて昼食、午後三時再び長野へ戻る直ちに師範学校にて二百余名の教員生徒に対し、「教育の効用」について演説する。

要旨はつぎの通り。

「教育は天賦の智愚を如何ともす可らず。如何に培養すればとて瓜の蔓に茄子は生らず。幕下の小力士が如何に勉強するも到底大関と為るの望みなし。教育家が教育さへすれば何人も大学者と為り大英雄と為る可しと吹聴するが如きは掛値のみ。然らば無用なりと云ふに、又決して然らず。深く潜める天授の資質を開発して人生の用を為さしむるは則ち教育の効用にして、譬へば猶ほ園丁の草樹を培養するが如し。自然のままに捨て置けば用を為さざるのも、心を尽くして養へば趣ある庭木として愛す可く、或は見事なる花を咲かしめ実を結ばしむ可し。」

師範学校を辞して、城山館にいたり、信濃毎日新聞社の主筆水品平右衛門氏が歓迎の辞を述べる。福沢諭吉の演説の要旨はつぎの通り。参会者地方有志約一二〇名。

「余の信州に来たりしは今回を以て初めと為せども、平生信州の人に接すること少なからず、聊か其気風を知る。余の見る所を以てすれば、信州の人は気骨あり。士風を帯びて品位卑しからず。類例を求めれば大阪人に似ずして、寧ろ江戸子に類するが如し。ここをもって往々論争を好み損得を争わずして、勝敗を争ふて利害を忘るることあり。気品の高さは甚だ善し、勝敗を争ふ亦可なりと雖も富を作るには損得を忘る可らず。信州は養蚕の盛なる地方にして年々之が為めに此地に入る金銭は壱千万円を下らざる可し。しかしながら当地方のひとびと未だ甚だ富めりと言うべからず。現に製糸家の如きは未だ自分の資本を以て業務を営むに至らず、横浜東京などの資本家に依頼し高利の元手を借り来たりて漸く原料を仕入れ糸を製する始

末なりとは遺憾にあらずや。思ふに資本の独立を計らんには営業と暮向きとを嚴重に分たざる可らず・・・

若し営業は営業、家計は家計として嚴重に經濟を分ち営業の損得に拘はらず、別に家計を立て利を得たればとて浪費をすることなくば数年の後には裕に資本を得んこと疑いある可らず。是れ余の諸君に勧告する所なり。」(引用)「時事新報 明治二十九年十一月一七日 福沢先生の善光寺参詣」より。

以降の日程は、つぎのごとくである。

明治二十九年十一月八日に野口孝治、宮沢俊二 高田への来遊を懇請、高田へ赴く。演説する。高田泊まる。妻、三八、里帰京。

同 十一月九日 高田を出る。長野でひるめし、小諸に着く。城址で小憩後、野沢に赴く。並木和一方に泊まる。神津国助、箕輪五助など歓迎。

同 十一月十日 御代田発 十一時三十分 汽車にて上州新町にいたる。柳莊太郎の案内で三井紡績参観 柳宅に泊まる。

同 十一月十一日 帰京。

第三章 諭吉の飲食の習慣

諭吉は天性の大酒飲みであった。酒飲みというものは、とかく料理にやかましい者が多いが、諭吉は難しい注文をだしたという話を聞いたことがないと言われる。一身の生活において、諭吉は甚だ簡単な書生流で、明治二十八年といえ、日清戦争の時で諭吉は当代一流の人物、政府もその言論を憚るという存在であったが、その春に静岡の慶応義塾同窓会から招かれて出席するときに、あらかじめ旅館に取扱について注意した手紙が残っています。すなわち、

「老生は、毎日定まりたるものを飲食し、定まりたる時に寝起きし、頓と余計な事を致さざる癖にていかなる御馳走あるも余り有り難くこれなく、旅宿の取扱なども馬鹿丁寧にして呉れては却って面白からず・・・例えば、どんすのふとんなど担ぎだして、美はすなわち美なれども、福沢の勞翁は宅に居て絹布の夜具を用いず、ただ木綿の^(ママ)奇麗に洗濯したるを貴ぶのみ。・・・老生の食べ物、朝、三州味噌の汁一品、少々濃くして、肴も鯉節もいれず、ねぎか豆腐の汁の実、こればかりにて一切ほかのものは不用なり。あるいは食前に牛乳かコーヒーを加え、パンにバターあればもっとも妙なり。宅にては毎朝用い候得共、旅中は必ずしも求めず。

昼、魚肉野菜とりまぜて二品ばかりあればよし。老生の平生にて三食の外は一片の菓子も不時に食い申さず、三四十年来の習慣、性を成したる事に御座候。」

上の手紙で、(明治28年3月30日 静岡にいた門下生の飯田三治宛) 福沢の起居飲食の様子

が大体わかり、また、福沢の好きな大酒は、母お順が非常に変わっており、「酒を飲ませるから、刈らせろ」といい、十二・三歳の頃から酒を飲ませている。『福翁自伝』によると、明治維新前後、飲酒の害をさとして禁酒に志し、まず、朝酒を廃し、次いで昼、夜と、次第、次第に酒欲を抑え、上のてがみにも「酒の極上品を少々」とある。福沢の書いたもの「肉食の説」や「西洋料理千里軒の引き札の文章」などは、福沢一流の奇警な文体で読むものを笑わせる。

第四章 福沢諭吉の影響を受けた信州人

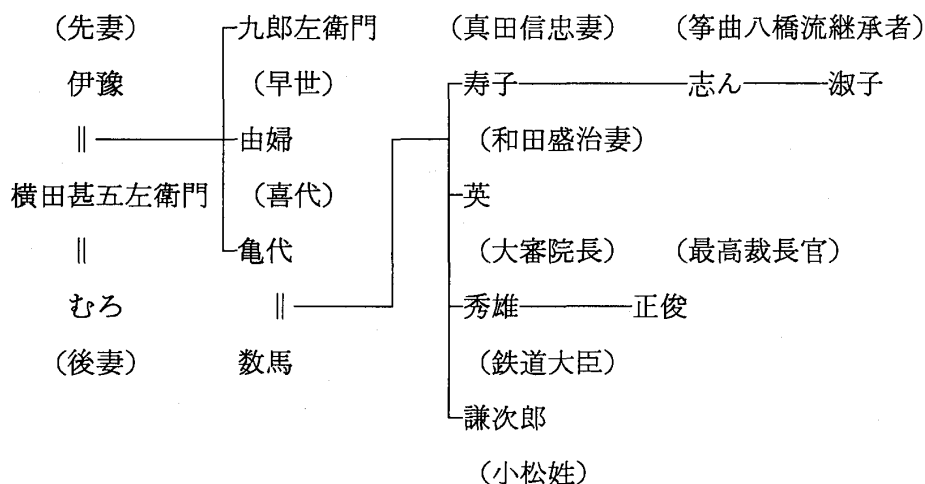
福沢の教え子（これを福沢門下生とよぶ）が全国に多数おり、長野県だけでも、福沢諭吉の生存中326人が入学している。著名な人物をあげれば、長野では松代の立田秀英、佐久間恪二郎（象山の子息）、小松謙次郎、長野の鈴木梅四郎、藤原銀次郎など、佐久からは黒沢弥太郎、箕輪伍助、神津国助、神津藤平、木曽では小野秀一、諏訪では名取和作、茅野では伊藤作左衛門、伊那では伊沢多喜男などがいる。以下主な福沢精神を実践した人たちである。

立田（真田）秀英 慶応元年6月6日入学、明治6年外務省へ、7～12年ロンドン、サンフランシスコ、釜山領事

佐久間恪二郎 明治4年6月3日入学、象山の嗣子、嘉永元年11月11日生まれ、明治10年2月26日松山で食中毒で惜しまれて死去、松山裁判所判事。

小松謙次郎 明治13年5月入学、文久3年11月23日生まれ、昭和7年10月15日死去、横田数馬次男、秀雄弟、逋信次官、鉄道大臣、貴族員。象山と親交のあった家。

（横田家の系譜）



神津国助 明治7年3月2日入学、安政6年生まれ、大正10年死去。佐久銀行、佐久商業銀行初代頭取、明治29年福沢諭吉信越旅行の際、野沢で歓迎会開く。

鈴木梅四郎（旧姓 小林）明治14年3月入学、明治20年4月正科卒、号、呑天、文久2年12月生まれ、昭和15年4月15日死去。三井銀行、王子製紙役員、代議士「医業国家論」の提唱者。

藤原銀次郎 明治20年1月6日入学、22年12月卒業。長野市安茂里出身、明治2年6月16日生まれ、昭和35年3月17日死去。三井銀行、王子製紙社長、昭和14年藤原工業大学設立、のち慶応義塾に寄付、工学部となる。15年米内内閣の商工相、軍需相等歴任する。

伊藤作左衛門 明治20年10月28日入学、同25年卒業。明治元年生まれ、昭和25年死去。諏訪郡宮川村出身、福沢諭吉が彼の作った学校を「大同義塾」と命名。生涯中等教育に捧げる。

神津藤平（こうず・とうへい）明治21年3月7日入学、同25年卒業。佐久郡志賀村出身、大正12年、河東鉄道会社創設、のち長野電鉄社長となり、ふるさと志賀村の名を取り志賀高原と命名、開発する。福沢の「人に交わるは馬に乗る如し、御法は吾に在って在す、得失常に定めなし、是非、なんぞ論ずるに足らん」を終生の教訓とした。

名取和作 明治29年2月入学、同年理財科卒業、明治32年8月第1回留学生として欧米へ、35年から41年理財科教授、のち東京電力に入社、鐘紡、信越加工、時事新報社長、慶応義塾理事等歴任。理財科は現在の経済学部。

小野秀一 明治32年4月普通部1年入学、同42年政治科卒業。西筑摩郡福島町出身、御嶽交通社長、小野商事社長。

（本論文は長野市メルパルクでの1999年8月3日日本英学史学会での講演要旨である。）

以上